

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第七十六号

原告団レポート

CO患者——
佐藤 勉 さん

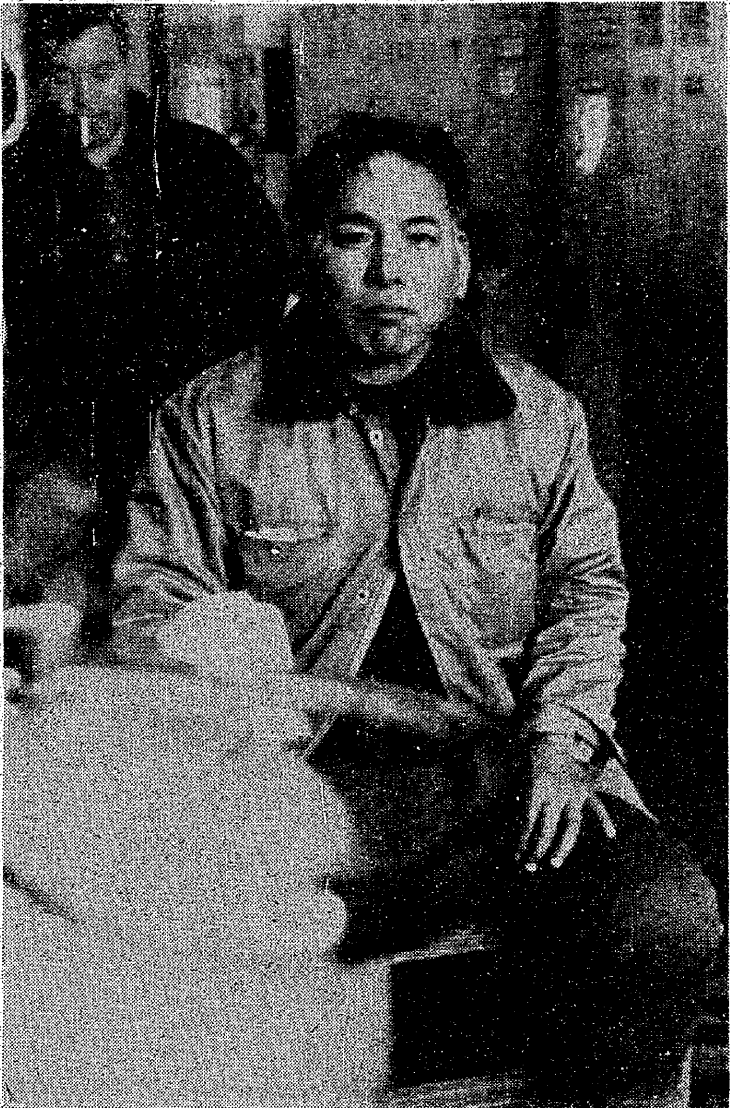
今は農作業

今、狂句づくりにひたむきな情熱を注ぎながら生きているCO患者がいる。それをひとりのテコとして、幾らかでも人間機能の回復の一助に、この切なる発心がその道を歩ませたという。

患者の名は佐藤勉さん。障害等級七級。三池炭鉱の団結力が、CO患者仲間のためにつくり出した造成職場のひとつ——万田作業所で働いている。

昭和三年一月八日生まれで、五十三歳。荒尾市原万田甲根五三〇番地に居住。ここから毎日同作業所へ。

三池大爆発(昭和三十三年十一月九日三川鉱で発生。四百五十八人の命が奪われ、さらに八百三十九人のCO患者——一酸化炭素中毒患者が作り出された)に被災することさえなかったならば、さしうめ今ごろは三川鉱の坑内に下がり、本来の採炭工として部厚いあの炭壁にどんでん返るはずだった。が、今はもっぱら除草や施肥、消毒など似もつかぬ農園作業。



軽い農作業の一日も終り、帰宅準備もとのえながらほつとひと息。ストーブの脇に腰をおろす佐藤さん。胸のなかをよぎる思いは、果たして何か？

期待して夢を次代に

狂句づくりにひたむきな情熱を注ぎながら生きる

期待して夢を次代に

狂句づくりにひたむきな情熱を注ぎながら生きる

狂句の道へ

彼が狂句づくりに取りつづけたのは、四十九年以前のこと。西日本新聞が募集していることを知りふと思いついて投稿したのが契機となった。思わぬ入選のよきこびが、被災以来眠りつづけていた人間的情熱の噴出となり、彼をこの道に誘ったのである。

同新聞の「狂句」欄に、その作品が幾たびか入選を果たしたときの思いを、彼は手記にこう書きしるしている。

「思えば狂句づくりに始めたのは、自分の才能が何処まで認められるか、試験を受ける気持ちもあった。今では一句一句新聞に掲載され、その数も十五、六句となった。私としては精一ぱい考えて投稿

作法のこと

狂句は、正しくは肥後狂句とい

した積りであったが、然し新聞に掲載されるのも見事な句で、人情の機微といふものがよくつかまれている。私は未だ未熟であり、これから他の先輩の句に教をこい、勉強したいと思っています。己れの未熟さを認め、未だ未だ遠い路と想うが頑張るのだ」(作句ノートNO.3から)

入選の常連

彼が、狂句づくりにこのような幾つかの約束ごとのあることを知ったのは、何となくそう西日本新聞に投稿するようになってからのことなのだ。

「狂句」に関する作品を、次に拾うと——
立小便　しずくふるうてな
おさした　生まれ故郷
くまの　コマ遊びの日の遠
白髪染　顔のシワまじとど
れんばな　折箱もつてくる病
水臭　やっぱり棄てるわけにいかない
か　の「男女の仲」に関する作品
味見して　高工感謝料払わし
た　白か素肌に迷わし
破滅　夜の間(シトネ)
た　こたわって
も真(二二)
どうぞ　奥の院まで見ては
いよ　終りの句など意味深々だが、作品のなかには、当然のこととはいえない三池炭のキラリと光るものもある。

「狂句」の言葉の流れこそ、俳句同様、五・七・五調を基調として成立するもの、俳句と違い季語に「やめたことか(小さいの)とらわれることがなく、さらに独意(喧嘩の仲裁は)」(彼自身の作)とある。狂句の「火

燃える怒り

ふり返れば、三井独占資本の災害責任を追及するために、遺族やCO患者四百二十人を原告に結集、三池炭が福岡地方裁判所に裁判を起こしてから八年に近い。すでに原因についての審理を終て、早や原告自身による損害の立証もほぼ終了。今後三井炭山側の情い抵抗が予想されるにせよ、裁判は、明らかに一路結審の方へ向かっている。

その間にも、変ることなく三井三池炭の真の暗黒底では年々労働者の命が奪われ続けられ、したがって労働者の胸の奥に、いつの日か爆発するのを待ちながら、たぎる怒りの炎がその固まりを大きくしていく。

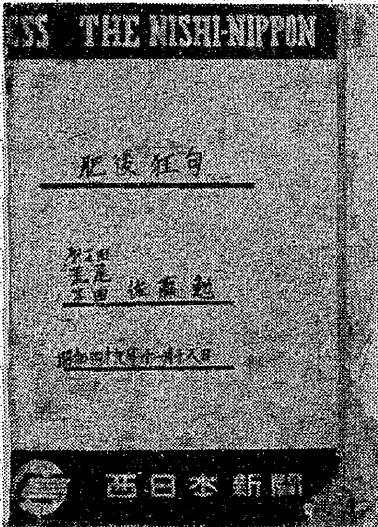
試みに大災害裁判に託した思いを問うと、彼は答えた——
「このようにたいそれた悲劇を二度とくり返させないために、こんな体にならば、責任を取りせなければ、どうにも気持ちが落ち着きません。また、裁判は必ず勝ちます。負ける道理がないです。よ」

採炭工が今は農園作業

の国会、など所属する狂句の結社も多く、作句ノートも山と積まれている。

ノートから

作句ノートのなかから、特に入選句の幾つかを拾って見よう。まず「家事」に関するもので——
股がって　そるが女ごんする
旅先で、ひとときながら、苦しみ



狂句作句ノートのひとつ。彼の命の火が燃える。

襲った打撃

妻の名は邦子さん。昭和五年五月十三日生まれだから、彼より二つ下で五十一歳。
恵まれた子とは、男ばかり三人。長男欣也さんが二十七歳(昭和二十九年九月二十一日生まれ)で、次男一也さんが二十四歳(三十二年七月二日生まれ)。二人はすでに卒業を終え仕事に就き、長男の欣也さんはマサヨさんという配偶もあり、早や女児が二人。三男の邦彦さんは二十二歳(三十四年七月六日生まれ)で、まだ福岡の某大学の二年に在学中の身。

それに養母(妻邦子さんの実母)ナミエさんがいる。七十八歳(明治三十六年二月二十四日生まれ)。耳が遠いしたが健在。子どもは三人ながらそれぞれの土地で暮らして、甲根の家には妻邦子さんと養母のナミエさんと三人だけ。

以上のしだい、今こそ彼の作句生活を支える人もないが、狂句生活を支える人もないが、大爆発に被災した昭和三十三年十一月九日といえは、まだ長男欣也さんが九歳、次男一也さんが六歳に、三男の邦彦さんにいたっては四歳だったのだから、この家を襲った打撃はさぞかし大きかったろう。まして大黒柱の彼は、そのため、ついに思いも寄らぬ重症の部のCO患者にされてしまったのだから。

子供に夢を

ときとして今も襲いくる得体の知れぬドウキがあり、何のかかわり合いから心臓・循環器の障害に悩まされねばならず、テロでも治らぬ記憶障害のためにわれながらあきれることあるほどの物忘れも……また彼のカルテに「高度の情意鈍麻」「軽度の痴呆」などと刻まれている非情な文字に出会えば愕然とする。

現に彼は後遺症の余りの苦さしに耐えかねて、あるときまで自分で自分の命を絶つことを考えたほどだ。

それでも、親としてはほとと子ども思いの人と見え、前記の同じ作句ノートのなかに書き記している。

「願わくば私の子供三人に、父のわたちを踏ませたくない。踏ませばならぬのだ」
また、次のような作品ももっている。
期待して　次の世代にかくる夢